

## 主日礼拝説教「言葉と真理と自由と愛」

日本基督教団石神井教会 2020年2月9日

### 【使徒書日課】ヨハネの手紙二 1～13節

<sup>1</sup>長老のわたしから、選ばれた婦人とその子たちへ。わたしは、あなたがたを真に愛しています。わたしばかりでなく、真理を知っている人はすべて、あなたがたを愛しています。<sup>2</sup>それは、いつもわたしたちの内にある真理によることで、真理は永遠にわたしたちと共にあります。<sup>3</sup>父である神と、その父の御子イエス・キリストからの恵みと憐れみと平和は、真理と愛のうちにわたしたちと共にあります。

<sup>4</sup>あなたの子供たちの中に、わたしたちが御父から受けた掟どおりに、真理に歩んでいる人がいるのを知って、大変うれしく思いました。<sup>5</sup>さて、婦人よ、あなたにお願いしたいことがあります。わたしが書くのは新しい掟ではなく、初めからわたしたちが持っていた掟、つまり互いに愛し合うということです。<sup>6</sup>愛とは、御父の掟に従って歩むことであり、この掟とは、あなたがたが初めから聞いていたように、愛に歩むことです。<sup>7</sup>このように書くのは、人を惑わす者が大勢世に出て来たからです。彼らは、イエス・キリストが肉となって来られたことを公に言い表そうとしません。こういう者は人を惑わす者、反キリストです。<sup>8</sup>気をつけて、わたしたちが努力して得たものを失うことなく、豊かな報いを受けるようにしなさい。<sup>9</sup>だれであろうと、キリストの教えを越えてこれにとどまらない者は、神に結ばれていません。その教えにとどまっている人にこそ、御父も御子もおられます。<sup>10</sup>この教えを携えずにあなたがたのところに来る者は、家に入れてはなりません。挨拶してもなりません。<sup>11</sup>そのような者に挨拶する人は、その悪い行いに加わるのです。

<sup>12</sup>あなたがたに書くことはまだいろいろありますが、紙とインクで書こうとは思いません。わたしたちの喜びが満ちあふれるように、あなたがたのところに行って親しく話し合いたいものです。<sup>13</sup>あなたの姉妹、選ばれた婦人の子供たちが、あなたによろしくと言っています。

### 【福音書日課】ヨハネによる福音書 8章21～36節

<sup>21</sup>そこで、イエスはまた言われた。「わたしは去って行く。あなたたちはわたしを捜すだろう。だが、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。わたしの行く所に、あなたたちは来ることができない。」<sup>22</sup>ユダヤ人たちが、「『わたしの行く所に、あなたたちは来ることができない』と言っているが、自殺でもするつもりなのだろうか」と話していると、<sup>23</sup>イエスは彼らに言われた。「あなたたちは下のものに属しているが、わたしは上のものに属している。あなたたちはこの世に属しているが、わたしはこの世に属していない。<sup>24</sup>だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。わたしは言ったのである。『わたしはある』ということ信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」<sup>25</sup>彼らが、「あなたは、いったい、どなたですか」と言うと、イエスは言われた。「それは初めから話しているではないか。<sup>26</sup>あなたたちについては、言うべきこと、裁くべきことがたくさんある。しかし、わたしをお遣わしになった方は真実であり、わたしはその方から聞いたことを、世に向かって話している。」<sup>27</sup>彼らは、イエスが御父について話しておられることを悟らなかつた。<sup>28</sup>そこで、イエスは言われた。「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、『わたしはある』ということ、また、わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりに話していることが分かるだろう。<sup>29</sup>わたしをお遣わしになった方は、わたしと共にいてくださる。わたしをひとりにしてはおかれない。わたしは、いつもこの方の御心に適うことを行うからである。」<sup>30</sup>これらのことを語られたとき、多くの人々がイエスを信じた。

<sup>31</sup>イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。<sup>32</sup>あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」<sup>33</sup>すると、彼らは言った。「わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。『あなたたちは自由になる』とどうして言われるのですか。」<sup>34</sup>イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。<sup>35</sup>奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。<sup>36</sup>だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる。」

## キリストの教え～互いに愛し合うこと

わたしたち石神井教会は来週、創立 62 周年を記念する礼拝を祝おうとしていますが、62 年前に石神井教会を生み出してくれた親教会の阿佐ヶ谷教会は今日、創立 96 周年を祝われています。阿佐ヶ谷教会は石神井教会の他にも二つの教会を生み出していますが、教会の方針なのでしょう、各教会は自立した後は特別互いに縛られることもなく自由に、それぞれの歩みを重ねてきました。このような、教会を生み出す教会と生み出された教会との関係は、初めは「親子」の関係にたとえられるものですが、その後、対等な関係になっていくに従って、「姉妹」の関係にたとえられるようになるようです。互いを「姉妹教会」と呼び合うのです。「兄弟」ではなく「姉妹」と、女性形で呼び合うのです。

それは、言語学上の理由もあるのかもしれませんが、しかし、それよりも、教会が最初の時代から、「主」であるキリストの「花嫁」に位置づけられてきたことが大きな理由のようです。使徒書日課（ヨハネの手紙二）では、「**選ばれた婦人とその子たちへ**」と宛名が記されていますが、これは「主キリストの伴侶であるところの教会と、そこで生み出された信徒たち」を指して言われているようです。

このような表現が教会に当てはめられるようになったのは、実のところ、教会が初めから女性たち抜きには考えられないところであったからなのかもしれません。主イエスの宣教の旅には、男の弟子たちだけでなく、主イエスの母を含む多くの女性たちが伴っていたと伝えられています。そればかりか、主イエスが復活なさったことを最初に告げたマグダラのマリアをはじめ多くの女性が、人々を主イエスのもとへとつないでいく働きを担っていたと伝えられているのです。

それは、そもそも主イエスの教えが女性と親和性のあるものだったからなのかもしれません。手紙の差出人である長老（ヨハネ）がキリストの教えとしてただ一つ記しているのは、「**互いに愛し合うこと**」です。この教えを越え出てはいけな、ここにとどまらない余計な教えをしようと近寄ってくる者は「家」に入れてはいけな、挨拶をしてもいけな、と長老は念押しをしています。

もちろん、女性だから皆、互いに愛し合うことが得意だ、というわけではないでしょう。ただ、当時の社会で、新しい知識や教えを学んでくる機会があったら、ほぼ男性に限られたでしょう。新しいことを学ぶと、人に教えたくなるものです。しかし、その教えは、キリストの教えの中にとどまっているか、互いに愛し合うことに結びついているか、吟味が必要だと長老は言うのです。

## 「わたしはある」

この手紙は、新約聖書中もっとも短い文書です。差出人の長老にはもっと紙幅を割いて書きたいことがあったことでしょうか。きっと、次に訪問した際には、手紙に記しきれなかったことを大いに語ったことでしょうか。そのときに何を語ったのか、もはやわたしたちには分かりません。けれども、わたしたちにとってはむしろ、この短い手紙が残され、新約聖書の中に収められたことが幸いだったかもしれませぬ。教会にとって最後にとどまらなければいけない教えは何だったかを、端的に思い出させてくれる文書となったからです。

福音書の伝える主イエスの教えも、要はこの「互いに愛し合うこと」という教えに集約されるのだと考えても、大きな間違いは無いはずでせう。福音書日課（ヨハネ 8 章）で、主イエスは、「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは**本**当にわたしの弟子である」とおっしゃられています。このヨハネ福音書は、他の福音書（マタイ、マルコ、ルカ）と比べて非常に多くの主イエスの言葉を伝えています。くどいほどにお語りになる主イエスの言葉が伝えられているのです。読み進めていても、ときに主イエスの言葉でお腹一杯になってしまいそうです。しかも、主イエスの言葉は、時に難しく、わざと聞く者を混乱させていらっしやるのではないかとさえ思わされるのです。

実際、日課箇所は主イエスと人々（ユダヤ人）との間で交わされた長い対話の一部ですが、それを聞いた人々の多くが主イエスを信じるようになったと途中で描かれているのに、それをひっくり返すようなことを主イエスは語り続けられているのです。この後には、「あなたたちはわたしを殺そうとしている」（37 節）と、まるで喧嘩を売るようなことをお語りになられて、最後、対話が終わる頃には多くの人々が信じることなく離れていってしまったと伝えられています。

主イエスの言葉は、「互いに愛し合うこと」とはまるで反対の結果を生み出している、と言わなければいけないのではないのでしょうか。これを読んでいるわたしたちは、福音書の中で描かれる人々のように拒絶反応を示すことがないとしても、どこか主イエスの言葉に引っかかり、戸惑い、別の人の言葉で置き換えて説明してもらえぬことを、期待しているのではないのでしょうか。

日課箇所の前半で主イエスが言われている「わたしはある」という言葉も、わたしたちを戸惑わせる言葉の一つです。それは、旧約・出エジプト記（3 章）の「柴の箇所」で、あのモーセが神から呼びかけられたときに尋ねてお答えいただいた神の名だと言われる言葉を思い起こさせるものです。神は、モーセに「わたしはある。わたしはあるという者だ」（出 3:14）とおっしゃられたのです。主イエスはモーセの前に現れてくださった神と同じ名を持つお方だと、そういうことなのかもしれません。そうだとせよ、なぜ「わたしはある」なのでしょう。

おそらくこの言葉は、「わたしはここにいる」という意味なのです。それは、目の前に互いが見えていれば不要な言葉です。相手が自分のことを見えていない、分かっていないというときにこそ発せられる言葉です。ちょうど、親の姿を見失った幼子に向かって「わたしはここよ」と母親が呼びかけるように。

## 本当に自由になる

しかし、親の姿を捜して泣いていた子らも、いつのまにか成長し親離れをして行くものでしょう。それでも、子にとっては、幼き日に「わたしはここよ」と呼びかけてくれていた存在は、いつまでも変わらず大きな意味を持っているものなのかもしれません。夕方、帰宅した子らが、父親にはただ「ただいま」と挨拶して素通りしながら、母親のいる台所に行くと今日あったことをあれこれと話し始めるのは、手渡した空の弁当箱を明日も詰めてもらうための社交辞令というわけではないでしょう。確かに、父親から発せられる言葉は、あれこれの知識であったり、世の中のルールであったりと、小うるさくも突き放すようなものばかりだけれども、母親から発せられるのは、「わたしはここよ」と招き入れてくれるようなものだ、子らの中には刷り込まれているのでしょう。

主イエスは、「**わたしの言葉にとどまるように**」と呼びかけられています。それは、わたしには、ときに父親の小うるさい言葉にも聞こえるのです。「**あなたたちは真理を知**」と言われれば、なおさらです。主イエスの言葉に知的な真理が含まれていると期待しながら、聖書を読んできたのです。真理の体系として主イエスの言葉を記憶し、体系化し、悟ることができたとしても願ってきました。けれども、どうも、そういうことではないのです。

「**真理はあなたたちを自由にする**」という言葉が、大学や図書館に掲げられてきました。主イエスはそれをご覧になられて、苦笑いされるのではないか。「真理(アレテュイア)」という語は、「**真実な(アレテュース)**」ものということです。それは、「まことの」ということです。お座なりではない、命を懸けたもの、ということではないでしょうか。主イエスが、「**わたしをお遣わしになった方は真実であり**」と言い、「**真理はあなたたちを自由にする**」と言われるとき、それは、命がけでなされたものであるということではないでしょうか。

だからこそ、主イエスは言われたのです、「**もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる**」と。御子がわたしたちを自由にする。どのようにしてか。命を懸けて、です。命を差し出して、です。だから主イエスは、この後すぐに、「**あなたたちはわたしを殺そうとしている**」(37 節)と言われるのです。命と引き換えにしか、わたしたちは自由になることができないからです。

それは、どのような自由か。「**互いに愛し合う**」という自由、なのではないでしょうか。真実に愛し合うという自由、なのではないでしょうか。わたしたちの「愛」は、まだ不自由なのです。自我に縛られ、利得に縛られています。相手にも自分にも縛られています。ただ、わたしたちは、命がけで愛してくれた人の愛を知り始めているのです。それは、母の愛のようなものかもしれませんが、主イエスは天の御父の愛だとお教えになりました。ご自身の命を差し出す愛に、母も父もないのです。そこから自由になった愛を、「わたしはここよ」とおっしゃる方が命がけで示してくださったのです。そして、「あなたもここに」とお招きなのです。わたしたちはただ、「わたしもここにいます」とお応えするのです。そこから始まる自由な愛の関係を、歩み始めるのです。